

コーチとして I
～学生スポーツにおけるファシリテーターとしての側面～

栗山 雅倫*¹

As a Coach I
～ Aspects as a facilitator in student sports ～

by

Masamichi Kuriyama

Abstract

It is important to recognize the subjective evaluation and its actual gap in the process of acquiring better sports performance. Regarding the necessity of both self-observation and others observation, various phenomena are generally confirmed in the performance learning process.

The aspect of sports as a culture has changed with the changes of the times, but it has not changed at any time, and its contribution to the human society is high. Student sports have shown a wide range of functions, especially in Japan, and have held various expectations. Not only does it contribute to the improvement of competitiveness itself, but it also has an extremely large educational significance.

As a function involved in university education and as a coach of competitive sports, it is important to discuss how the function should be.

* 1 東海大学体育学部競技スポーツ学科

I. 緒言

文化としてのスポーツの様相は、時代の変遷とともに変貌を遂げてはきているが、いつの時代も変わりなく、世の中への貢献は高い。学生スポーツは、とりわけ日本国内において幅広い機能を示し、さまざまな期待を担ってきた。それは競技力向上そのものへの貢献もさることながら、教育的な意味合いも極めて大きいのではないだろうか。

筆者自身、大学教育に携わる者として、そして競技スポーツのコーチとしてプロフェッショナルリズムを追求しながら、スポーツ文化に、そして学生スポーツに関わり続けてきた。そのなかにおける気づきを整理することで、本論考のテーマである「コーチとして」のさらなる進化につなげる足掛かりとしたいと考えている。

II. 本論考の目的

コーチとして、あるいは指導者としての機能は、現実的には多岐に渡り、単に技術戦術等のパフォーマンス指導だけに特化できるケースは必ずしも多くない。その是非はともかくとして、コーチとしての機能、あるいはその機能を果たすために必要なことについて検討することの価値は低くない。

本論考においては、筆者自身の足跡を辿りながら、「コーチとして」の哲学めいたものや機能などについて、徐々にまとめつつ、そして「コーチ」のあり方の一つとしての示唆を論じたいと考えている。

これから継続していく計画である論考全体の第一回目の試みとして、「ファシリテーター」としての側面が、チーム作りにもたらしたことについて一つの事例を俯瞰することとした。

III. 強化を目指すチームの足掛かり

筆者は2005年4月より東海大学に奉職することとなり、女子ハンドボール部の指導に、監督として携わる機会を得た。

女子ハンドボール部の監督に就任した当時は、すでに在籍していた学生の期待と不安が紛れもなく混在していたことと思われた。筆者のその機会を得る前段は、国内トップリーグである日本リーグのコーチとして、あるいは各カテゴリーのハンド

ボール日本代表チームのコーチやアナリスト的な機能としてキャリアを重ねてきたこともあり、学生にとっては「活動環境に変化が生じるであろうとの憶測が強かった」と、当時の学生の後日談として語られたことは記憶に鮮明である。

大学スポーツチームの監督として、そして教員として競技スポーツのチームに携わることが初めての機会であったこともあり、やるべきことの多さ、社会人チームとの環境の違いには何かと思知らされた。しかし一方で、学生の持つバイタリティ、そして取り組めることの自由度の高さに大いに期待を寄せた。

「自分たちも高みを目指してみたい」と当時の四年生は早い機会に申し出てきた。これを好機と捉え、様々なことを働きかけ、「前に向く」チームづくりに向け始動した。その一つとして、2021年度にはついに「第17回」を迎えた「東海ハンドボールフェスティバル」の開催にこぎつけた。

同取組の開催には、様々な意味を見出していた。とりわけ期待したのは、「賛同者」の確保であった。当時は部員数も多くなく、競技者としてのキャリアも十分とは言えない構成ではあったが、前任者である東海大学元教授の平岡秀雄先生のもとで作られた、「展開力のある攻撃」を足掛かりとして「積極的な戦術的特徴を有するハンドボール」作りを就任初年度から展開することができた。いわば“特徴あるハンドボール”を示すことはできかけていた。そしてそういった取組に関心を示してくださる高校チームの指導者の存在が、大きな後押しとなった。

また、開催を通じて学生の動きは活発であった。詳細は後述する。

IV. 東海マーメイズ・ハンドボールフェスティバル

1. 企画と変遷の概要

企画開催のマインドは前述のとおりであるが、その具体的内容は合同トレーニングによる強化や、企画内にカップ戦を催し、あたかも公式戦のように切磋琢磨し合うといった内容を継続してきている。年々歳々その内容は変化を遂げてはいるものの、大きな流れは継続して取り組まれてきている。

カップ戦については第1回から変わらず続けており、2017年からは持ち回りのトロフィーも立派なものにリニューアルされ、優勝を飾った歴代チームの名が刻まれ続けている（図1）。



図1 トロフィー等

参加チーム数も大きな変貌を遂げてきた。第1回は6チームの参加であり、また回の発足もその6チームの指導者陣から発せられた声が必要な役割を果たした。第17回は29チームの参加となり、参加チームの競技レベルも神奈川県内で頑張るチームから、全国のトップゾーンに名を連ねるチームまでとなった。ご参加いただいている先生方の声からは、「このカップ戦の優勝チームは、かなりの確率でその年の全国のトップゾーンに行っている。」といったようなことも聞かれ、会の充実をうかがわせる。

学生は基本的にあらゆることを主体的に実践するが、パンフレット（図2）の作成等も担当している。ここ数年はカラー印刷の本格的なものを、全国規模の公式戦大会さながらのしつらえのものを作成できるようになっており、学生の取り組みの資質向上がうかがえる。



図2 企画パンフレット

2. 部員のオリジンとの関係性

現在の女子ハンドボール部所属学生は34名であり、うち28名が高校生の時に東海ハンドボールフェスティバルに参加したことがあるといった状況であった。また参加経験のない学生のうちにも当該企画開催期間と高校時の公式戦が重なり、参加が叶わなかったという背景を持つ学生もあり、この企画が学生募集あるいはチーム参入のきっかけとしての役割をいかに大きく果たしているかが伺える。

さらに卒業生に目を向けると、当該企画開催以降に入学した卒業生80名のうち、49名が参加経験者であり、チームの歩みとともにあり続けた企画であったことに疑う余地はない。

3. ターニングポイント

1) 草創期から

第1回から、学内の多方面へご指導を請い、特にスポーツ課には多くのお知恵を拝借してきた。2008年、松永達也氏がスポーツ課に配属されてきたことをきっかけに、スポーツ課と当該企画との連携は一層深まり、“東海大学からのハンドボール文化の発信”といった試みに勢いを付けた。

さらに2009年、山下泰裕副学長が体育学部長の際に、大学スポーツの活性化の一貫の中で、女子ハンドボールのリーグ戦本学開催である“ホームゲーム”企画が実現するなど、女子ハンドボール部史の中でも躍進する動きが加速化されてきたタイミングであった。その動向と前後して、当時の山下体育学部長が企画に立ち寄られたことも、参

加者の意識高揚に拍車がかかったこととして忘れ得ない。

2) 発展期

さらにこの企画が充実を迎えるのは、2017年、当時のスポーツ課に、課長として木村真人氏が就任し、伊地知弘樹氏、宝榮伸幸氏とともにチーム内や学生の活動のみでは手が届かないところまで企画の充実を後押ししてくださって以降のことである。「高校生にグローバルスタンダードな視点で競技に触れる機会を」とのスローガンのもと、ハンドボールの本場ヨーロッパで展開されるような仕掛けにヒントを得つつ、バスケットボール競技のショーアップにも尽力されてきた各位のノウハウを積極的に活用した取り組みは、まさにハンドボール文化発信の地として、東海大学もその一翼を担える時代が突入したかのように実感した。また、そのもとに大いに躍動したのは女子ハンドボール部の学生たちであり、職員と教員がともに学生教育に密接に携わる機会となったことは特筆すべき内容である。

3) 新たなる挑戦期

(1) 第16回の意気込み

新型コロナウイルス感染症拡大による未曾有の世界規模的危機を迎えた2020年、すべての活動が抑制されることが余儀なくされた。スポーツ活動も例外ではなく、ありとあらゆる大会が中止となり、学生は途方に暮れた。しかしただ途方に暮れるだけではない若さのエネルギーがあり、チームとして培ってきたスピリットがあった。

チーム自らの活動も制限の中で出来るだけの仕掛けを繰り出し、たとえ大会がなくなってもチーム内の対抗戦をイベント化し、ユニフォームを着て映像を配信した。「出来ることはある。いかなることにも屈しない。」繰り返しチーム内で鼓舞しあい、安全性の確保を何よりも最優先にしながら、それでも遅く歩み続けた。その学生の姿を目の当たりにし、これほどの感動をかつて感じたことがあったろうかと思える日々が続いた。

第16回の開催に踏み切ったのも、学生の取り組みへの覚悟があったことが何よりも大きい。スポ

ーツ課もまた、その学生たちにエールを送り続け、結果としてたった4つの参加校ではあったが、それでも襷を繋いだ。スポーツ文化における新たな挑戦が確かに見られ、そこに携わるコーチとして、沢山の学びを得た。

(2) 第17回の様相

第16回があつてこそ、第17回はかつての賑わいに負けないほどの盛況な開催に至った。ここでもスポーツ課から組織変更し、その機能を発展し継承したスポーツプロモーションセンターの多大なるご尽力があつてこそその充実であつた。



図3 大会の運営の様子

企画の進行は、無論、万全の安全対策を施した中で、全29チームの参加を得て実施された。企画内に開催される「東海マーメイズカップ」は、9校の参加で行われ、質の高いものであつた。優勝した石川県小松市立高等学校のパフォーマンスは圧巻で、コロナ禍における環境下の様な条件でも取り組める“パフォーマンスづくり”の好例につながるに相違ないと考える。

第17回の開催を事故なく終え、さらにはその実施の中で自身のパフォーマンス向上も同時に展開した。そしてその企画の終了後1週間後に迎えた国内最高峰の大会である日本ハンドボール選手権大会で躍動し、国内トップリーグの日本リーグチームからも勝利を挙げるに至った。

遅いパフォーマンスを披露した学生の頑張りには脱帽である。そして競技力の向上と、このような取り組みにおける真摯な姿勢との間における

密かな関係性について、確実なものを感じる思いを禁じ得ない。

4. 参加者の声

実際に企画に高校生のチームを率いて参加された先生方の評価も、このような取り組みを客観的に評価するためには大変重要であると思われる。とりわけ長きにわたり当該企画に参加し、そして企画の充実には欠かせなかった方々のご意見を参照されたい。

1) 大森聡氏

大森聡氏は、日本ハンドボールリーグ所属チームである、プレステージ・インターナショナル アランマーレの強化部長であり、第1回東海ハンドボールフェスティバル開催の仕掛け人のお一人でもある。氏は、富山県高岡向陵高等学校を率いて全国制覇を成し遂げた功績者であり、筆者がハンドボール日本代表女子チームの監督を務めた際には、コーチとしてその手腕を発揮された。

大森氏は、この機会を高校生アスリートにとって、いわゆる“次に進むカテゴリー”との交流や合同トレーニングをもできる貴重な機会と捉えていたとのことであり、パフォーマンスのみならず、ホスト役として尽力する学生の姿から学ぶ“人間教育的な部分での貢献”を感じる機会であったといわれた。

第1回目から現在所属する日本リーグチームに移籍するまでの間、11回に渡り皆勤して参加した氏の何よりの実感として「朝から晩まで没頭させてもらった」機会であったとも語られた。没頭できた理由の大きな部分として、開催の時期と環境といった条件があいまったことにあると言われ、トレーニング施設、学内という宿泊条件、回を重ねるうちに増えていった参加チームとの幅広い経験が、「新チーム始動の一つの重要な取り組みとして、ありとあらゆるベースを創るかけがえのない機会であった」と述べられている。

今後の東海ハンドボールフェスティバルへの大森氏の期待として、「学生に主体的に運営してもらっているということに関し、“目指す像”を見出してきた。そのことについては普遍的なありようを

心から望む。」とし、「そのためにも環境整備が続いていけばこの上なく有難い。」と語られた。現時点では大分改善がなされてきたが、企画の草創期には常に天候状態を心配し、使用できる施設といった点に不安を抱いていたことも事実であったという。また、「一つ一つの課題と向き合いながらも、ハンドボール界にとっての貴重な機会であり続けて欲しい。」とのメッセージが添えられた。

2) 小川至門氏

小川至門氏は、2013年3月まで岩手県立不来方高等学校の女子ハンドボール部監督として当該企画に参加し、その後は岩手県立花巻南高等学校女子ハンドボール部監督として本企画に幾度となくご参加いただいている先生である。また、ハンドボール日本代表 U18 チームのコーチも務めた人材である。

氏は、2つのチームの指導者という立場で参加する中で、あらためてこの企画に対し感じることは、“ナショナルからグラスルーツまで”というフレーズに集約されるという。不来方高校は、氏の指導を通して、東北チャンピオンとして、そして全国トップクラスまで名を連ねる力をつけてきた。そして花巻南高校へ異動された後は、今度は競技経験の必ずしも豊富でない生徒と向き合いながら、競技の魅力を伝達し、努力することの意味合いを説き、人間教育にも尽力されてきた。その中で競技スポーツとトップチームのあり方について様々な考察を重ねてきたとのことであり、「あらためて影響力のあるチームがこのような企画を通し、ハンドボール文化を懐広く発信する価値を確信した。」と語られた。

花巻南高校女子ハンドボール部としての指導を展開するようになると、“ボールを投げる”から指導を始めることも少なくないという。氏が当該企画に花巻南高校として参加するようになると、「“ボールを投げる”ことから始めることを、恥じることなく向き合える場所でもあった。」と言い、トップとしてもグラスルーツとしても希望を持てる場であることが確認できたとのことである。

「フェスティバルという言葉が良いですね。」と小川氏は楽しそうに言葉を発した。さらに小川

氏曰く「栗山さん（筆者）のよくよく言葉にされる“ハンドボール文化を専門教養として学ぶ場”にある学生さん達が、懐広く、あらゆる競技者層が前を向く機会として多方の高校生ハンドボールアスリートと向き合う場であることが有難い。」とのことである。

氏が言葉を続けるのは、「そういった意味で、ハンドボールを大事にする場であるが故、いわゆるコンプライアンスもきちんとしている。」とのことであった。指導者として襟を正し、新たに次のステップへ向かい始める場所であり続けてほしいと、なんとも面映い有難い表現を預かった。

氏の当該企画への今後の期待は、「東海大学女子ハンドボール部の学生が、女性アスリートとして学びを遺憾無く発揮する場であってほしいし、学生の皆さんには“女性アスリートとしてのあり方”を示す一番槍であってほしい。笑顔で努力をできる女性アスリートとして是非活躍いただきたい。」とのことであった。小川氏の御夫人は、ハンドボール韓国ナショナルチームの一員として、オリンピックでのシルバーメダリストにも輝いた実績をお持ちの指導者である。その奥様が最近ご出産なさり、国内最高峰の大会である日本選手権にて現場復帰を果たされた。「子供を産んでも是非活躍し続けてほしい。」との思いでいるという。そして東海大学の学生にも同様の思いを馳せており、企画参加のたびに思いを深めるという。

以上のように、当該企画に参加し、かつ会の充実に極めて重要な存在であった方々の語りをお預かりし、そして深く筆者の胸に刻まれた。学生スポーツならではの“学ぶ者”としての取り組みが、参加者の賛同を得た傾向が見られ、企画開催側の意図であった“賛同者”を得ることが実現し、チームづくりの一つの礎を築く機能を果たしていることがうかがえた。

高い競技力を示すことのみが、チャンピオンスポーツに身を投じる者の学びの成果ではないということ深く考えさせられた。

V. 学生の学び

学ぶ場である大学、そこにおける学生スポーツ。

学生は大学生アスリートとして、学びの中で、そして学びとともに競技に向き合い、競技力を向上させ、それらを通して人として逞しくなる。必ずしも卒業後に直接ハンドボール競技に携わる者ばかりではないが、確かな学びの場として、トレーニングや試合参加以外の取り組みも重要な役割を果たすことが確認できた。

VI. ファシリテーターとしてのコーチ

本論考冒頭に触れたように、「コーチ」としての呼称がつく者の機能として、ファシリテーター的側面が必要であるかの是非は、考える余地はあると思われる。しかし実際に学生スポーツの、とりわけ競技スポーツチームのコーチングを展開するにあたり、学生のあくなき向上心の矛先が、競技力向上に確かに向けられる。その向上心の成就のためには環境が必要であり、向上心をかりたて続ける後進の存在もまた欠かせない。

ハンドボールを通して魅力ある活動をすること、そしてそれを発信すること、学生の母校の指導者は大いにそれに関心を示し、そしてその関心の拡がりには、決して小さくはない幾らかの水平展開がなされた。結果、向上心の高い後進を迎え、いわゆる特待生制度などの条件のみに左右されない学生募集の実現につながった可能性は否定できない。

VI. 結語

質の高い強化環境を確保しない限り、競技力の向上は期待できない。そして学生の競技スポーツにおいて、必ずしも環境整備に必要な条件整備をそれぞれが特化して担うようなポジションや機能が確保できることが望めないこともしばしばである。

ある意味においては、そういった環境整備の機能をも学生が担うことが“学び”そのものであり、またそのことを“学び”へとしつらえることが活動の充実に繋がることも事実である。

コーチをはじめスタッフも同様に環境整備の条件を果たす機能や工夫を求められる。そこに向けてエネルギーを惜しまない姿勢もまた、コーチとしての、とりわけ学生スポーツに携わる指導者の大事な機能的側面であるのではなかろうか。